

「愛<sup>かな</sup>しい。」

なつかしい言葉でした。

平安の世で、わたしの姫さんは、女房たちは、

誰かをいとおしく思うときに、

この言葉を口にしたものでした。

小説の主人公「梨子<sup>りこ</sup>」とともに、

現代と江戸時代、そして平安時

代とを歩き来し、共感や違和感

を抱きながら、異なる文化を少

しずつ理解していった川上弘美

が最後に行き着いたのは、「愛と

は何か」というテーマだった。



Kawakami Hiromi

川上弘美

小説家

AIR就任期間 2017年10月~2020年3月

川上弘美 紹介ページ [https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/index.html)



東京都生まれ。1996年『蛇を踏む』で芥川賞、1999年『神様』でBunkamuraドゥマコ文学賞、紫式部文学賞、2000年『溺れる』で伊藤整文学賞、女流文学賞、2001年『センセイの靴』で谷崎潤一郎賞、2007年『真鶴』で芸術選奨文部科学大臣賞、2015年『水声』で読売文学賞、2016年『大きな鳥にさらわれないよう』で泉鏡花文学賞を受賞。2016年『日本文学全集』（池澤夏樹編）において『伊勢物語』を新訳。2019年、紫綬褒章受章。

現代を生きる女性・原田梨子<sup>りこ</sup>が、生涯のパートナーに選んだ生矢<sup>なまや</sup>への愛と苦悩の狭間で、夢を見るようになり、時空の往還を繰り返し、夢に見る江戸時代・平安時代で在原業平の足跡を辿る。

川上11



単行本 川上弘美『三度目の恋』（中央公論新社、2020年9月）

書影は同社提供

『婦人公論』にて連載（2018年1月23日号～2020年2月10日号、全48回）

昔、と言いかけたとたんに、不思議な気持ちになりました。昔。それはいつたどのくらいの以前のことなのでしょう。わたしはもうさほど若くはありません。けれど、年老いてもいい。

昔。それは今のわたしにとっては、たったの数年前をさす言葉でもあれば、わたしが生まれたばかりの四十数年前をさす言葉でもあれば、もつと以前をさす言葉でもあるのです。そう。

昔のある時、わたしは恋をしたのでした。あのひとに。



『三度目の恋』5頁より

それは、今昔愛の物語

当初から、「伊勢物語」をモチーフにした恋愛小説を執筆することは決まっていたのです。しかし、ただ「伊勢物語」の舞台を現代に移しただけでは、自分が書く意味はない、と思ったといいます。

川上さんは、稀代の色好みである主人公、在原業平<sup>ありのなひら</sup>という人間を掴み切れずにいました。意外にも男性同士の友情や、勤め人としての顔が印象的に描かれているものの、魅力の核心が分からない業平。小説の執筆をとおして、その



『三度目の恋』連載完結を  
記念して行った座談会

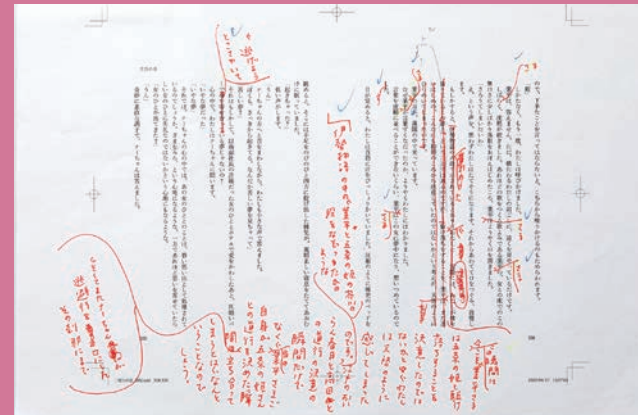


てっしんさいぶんこ  
鉄心斎文庫の  
「伊勢物語」資料を  
眺める川上氏

平安時代の暮らしに  
ついて研究者と  
資料を読み解く



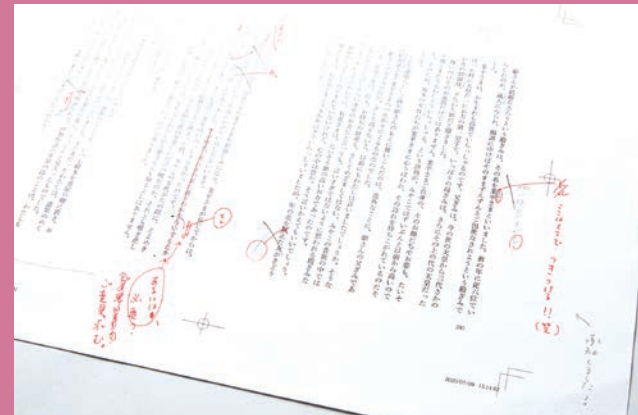
川上 12



川上弘美  
『三度目の恋』  
校正原稿  
(写真上段/初校、  
写真下段/二校)

主人公「梨子」が、「平安と現代の、両方の時間の中に放り出され」、自分ではない女性たちの身体に入る場面は、初校の段階で大幅に加筆がなされ、「伊勢物語」の「芥川」をモチーフに、物語の時間軸をさらにダイナミックに揺り動かした(写真上段)。

「業平」の登場場面で、名前に改めてルビを振ることで彼の存在を印象付けたい、という編集者への指示。川上氏と担当編集者との校正上のやりとりで、作品がさらに磨かれることがわかり興味深い(写真下段)。



川上 13

謎を解き明かしたいと思いましたが。

もうひとつ川上さんの心を挿んだのが、「伊勢物語」が江戸時代を通じてベストセラーであったということ。平安時代よりも後、そして現代よりも前に、多くの人が、絵巻や写本(24〜26頁)だけではなく、注釈書や絵入版本(27頁)を通して「伊勢物語」を楽しんだ痕跡が、遠く思われた平安時代を、現代に少し近づけてくれたのです。

ワークショップで試みたのは、研究者たちに、江戸時代や平安時代の生活・文化・仕事・社会の在り方について、事細かに尋ねることでした。たとえば平安時代に一般的であった、男性が女性の許へ通うという「通い婚」。正妻ではない女性の許を訪ねた次の朝、男性はどちらの家から出勤するのでしょうか？ 妻は嫉妬しないのでしょうか？

細かな問いにひとつひとつ向き合いながら書き上げた『三度目の恋』では、現代を生きる女性・梨子が、夢の中で時代を往還しながら、いにしえの人々の愛の在り方を理解してゆく様が描かれています。

ワークショップを経て

「伊勢物語」の上質なコレクション  
 「鉄心斎文庫」(24〜28頁)に  
てっしんさいかんこ  
 収められる、多様な古典籍と出会  
 い、脈々と愛されてきた「伊勢物  
 語」の享受の豊かさに感銘を受け  
 た川上さん。ワークショップでは、  
 江戸時代や平安時代の社会や文  
 化、暮らしなど、物語と物語の間  
 間ともいえる謎について研究者に  
 尋ね、共に考えることで、『三度目  
 の恋』で梨子が体験する時代や、  
 過去の人々の在り方について理解  
 を深めた。



1



2



3



4



5

『三度目の恋』連載完結記念 座談会の記事  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/sandome\\_taidan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/sandome_taidan/index.html)



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#kawakami>



1②研究者と共に、鉄心斎文庫の資料をひらく。 ③執筆をととして業平の姿を追い求めた。  
 ④平安時代、手紙に使う色紙の組み合わせを学ぶ。 ⑤『三度目の恋』連載終了後、研究者と共にその道のりを振り返った。

川上2



『伊勢物語絵巻』 江戸写 巻子本 1幅

もと5巻～6巻から成ったと思われる絵巻の零本(端本)。巻頭に「伊勢物語第四」の内題を持ち、詞書は第69段冒頭から第85段途中までを備える(以降第87段まで数紙脱落か)。絵は第69段・第71段・第80段・第81段・第82段・第83段・第87段に該当し、第87段を除きそれぞれ対応する詞書の段末に続ける。図様は嵯峨本を参考としつつも、判型に則した改変や脚色を加え、また詞書料紙にも金銀泥の下絵を施す。(岡田貴憲)

川上3



『龍田川業平之図』 江戸中期写 巻子本 1幅

狩野派から分派した鶴澤派の第3代鶴澤探索(1729～1797)が、明和6年(1769)に41歳で法眼(僧位のひとつ)となった後の作。後筆の外題には「楓業平東下り図」とあるが、描かれるのは第106段を題材とした、龍田川に流れる紅葉を眺める業平の像で、タイトルは箱書による。探索は狩野探幽(1602～1674)の門人だった鶴澤探山(1655～1729)の孫にあたり、一説には円山応挙(1733～1795)も探索に師事したと伝わる。(岡田貴憲)

川上4



『伊勢物語芥川之圖』

鈴木其一筆  
江戸後期写  
巻子本 1幅

江戸琳派の祖・酒井抱一(1761～1828)を師にもつ絵師・鈴木其一(1796～1858)が、「嗚々其一」と名乗った画風形成期(1829頃～1844頃)に描いた第6段の図。二条后を背負い川縁を駆ける業平の傍らに記された「花の散りつもる芥川をうち渡り」は、第6段に取材した能曲「雲林院」の一節で、観世流分家第6代当主の観世華雪(1884～1959)が昭和15年(1940)に同曲を演じた折、囃子方を務めた当時の所蔵者の依頼で加えたもの。(岡田貴憲)

川上5



『伊勢物語図 遊女讃』

狩野永納筆  
延宝6年(1678)写  
巻子本 1幅

京狩野派第3代の絵師にして、日本初の画人伝『本朝画史』の著作で知られる狩野永納(1631～1697)の、48歳時の作。描かれるのは『古今和歌集』と『伊勢物語』から選ばれた6首の歌意を表した図で、これに京都島原の遊女と思われる「夕霧」「奥州」「かほる」「芳野」「小太夫」の5名が、対応する和歌本文と各々の名を加える。署名の「居翁」と落款の「一陽齋」はともに永納の号で、特に後者は晩年に使われた号とされる。(岡田貴憲)

## 『伊勢物語』(絵入版本)

元禄17年(1704)刊  
袋綴半紙本 1冊



京都の書肆・林和泉掾による万治3年(1660)刊本の後印本(年記・住所削除)から、さらに刊記を埋木して改めた後刷り本。林家は幕府の刊行物を手がけた御書物所で、明暦3年(1657)に出雲寺和泉掾の官名を名乗り元禄期からは江戸日本橋にも出店した。万治3年本は判型を小型化した最初の版本で、全49図の挿絵は嵯峨本を模するが、人物の位置や向きに改変が見られ、特に第125段では独自の構図を有する。(岡田貴憲)

## 『伊勢物語』(嵯峨本)

慶長13年(1608)刊  
袋綴大本 1冊  
(上巻欠、現状は覆刻整  
版本を取り合わせる)



京都嵯峨の豪商・角倉素庵(1571~1632)が本阿弥光悦(1558~1637)らの協力の下、豪華な雲母刷り表紙や色替わり料紙を用いて光悦流書風の木活字で印刷した古活字本。嵯峨本は『伊勢物語』版本の先駆けとして後の模範となったが、中でも当該本は第一種本と呼ばれる初刊本に属する。整版による全49図の挿絵は室町期絵本・絵巻の影響下にあり、巻末の刊語には公卿・中院通勝(1556~1610)の署名・花押がある。(岡田貴憲)



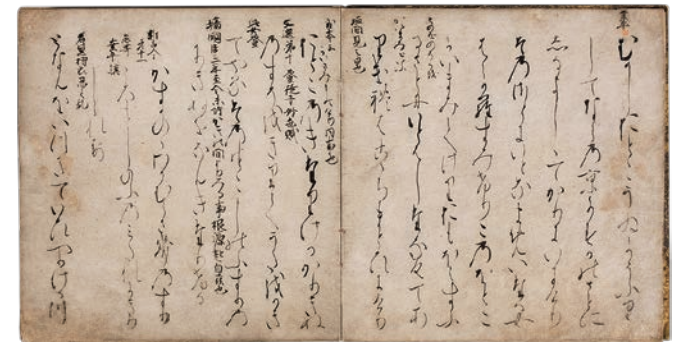
## 『業平図』

なりひらず  
中村芳中・筆  
江戸中後期写  
卷子本 1幅

京都出身で主に大坂で活躍した中村芳中(?~1819)の作。芳中は尾形光琳(1658~1716)に私淑し、享和2年(1802)に『光琳画譜』を刊行したことから琳派の絵師として著名だが、文人画や俳諧からの影響を受けた、流派にとられない独自の画風を特徴とする。第9段を題材とする本作は、濃度の異なる絵具や墨でにじみを作り出す琳派の技法「たらし込み」を用い、かきつばたの咲く川辺に行む業平の姿を親しみ深く描き出す。(岡田貴憲)

## 『伊勢物語』(古写本)

伝二条為氏・筆  
鎌倉中期写  
列帖装柙型本 1冊



現存する最古の『伊勢物語』古写本の一つ。伝筆者の二条為氏(1222~1286)は二条家の祖にして藤原定家(1162~1241)の孫にあたり、巻末には定家書写の根本本に由来する奥書(「抑伊勢物語根源…」)を備える。同奥書に続いて「他本」による伊勢と業平の略歴を載せるほか、本文の行間にも定家の加えた勅物(注記)とあわせて他種の注記を記し、初期の享受資料としても貴重。昭和10年(1935)指定の旧重要美術品。(岡田貴憲)



いせものがたりずびょうぶ  
『伊勢物語図屏風』 江戸前期写 屏風 6曲1双

主要章段を含む計45段分の場面について、おおむね前半段を右隻、後半段を左隻に配した絵屏風。各場面は嵯峨本の備える挿絵全49図の範疇に収まり、図様も嵯峨本を模するが、一部に独自の絵柄を盛り込む。つとに斎宮歴史資料館蔵やThe Cleveland Museum of Art蔵の伊勢物語図屏風との作風の近さが指摘され、いずれも宗達派の画風を持たない点で同時代作品から際立つが、中でも本作は嵯峨本に最も忠実である点を特色とする。(岡田貴憲)

小論文

## 『伊勢物語』享受史と鉄心斎文庫

Okada Takanori

岡田 貴憲

国文学研究資料館  
助教

「見るめこそうちふりぬらめ年へにし  
伊勢をの海人の名をや沈めむ」――

『源氏物語』絵合巻に描かれる物語

絵合わせの場で、藤壺中宮は右方の

『正三位』なる流行物語に一定の評価

を与えつつも、古びてもなお衰えない

名声を重んじて左方の『伊勢物語』に

軍配を上げた。平安中期にすでに古

典化していた『伊勢物語』は、作者も

成立事情も不明ながら早くより名作

の誉れ高く、王朝の貴族達を魅了し

てきたとみられる。

当初は在原業平(八二五〜八八〇)の伝説的生涯の  
実記として娯楽的に読まれたであろう『伊勢物語』  
は、やがて歌学の隆盛とともにその性質を変え、和歌  
の教養書として敬意を集めていった。平安末期の歌  
人である藤原清輔(二〇四〜二七七)の『袋草紙』、  
そして藤原定家(二二二〜二四二)の『詠歌大概』  
は、いずれも『伊勢物語』を歌集の列に入れ、実際に  
物語和歌を撰集対象としない勅撰和歌集にも『伊勢  
物語』からは入集している。そうした地位の変化を裏  
付けるように、定家は『伊勢物語』の証本(根拠とす  
べき本)作りに腐心し、当時本文や章段数に様々なバ  
リエーションが生じていた『伊勢物語』の写本を収集  
比較して、いくつもの校訂本を作成した。それらの定  
家本は、全二五段からなる『伊勢物語』の基本形と  
して以後の規範となり、今日でも定家晩年の書写に

考証学に徹する「新注」の時代をもたらされる一方、  
出版文化の開花に伴いかつてない大衆化の道を歩  
む。とりわけ版本の嚆矢である嵯峨本が、室町期の  
絵巻を模範とした挿絵入りで刊行され好評を博し  
たことで、その影響下に多様な整版本が作られ、『伊  
勢物語』は市井の人々に広く受け入れられた。『仁勢  
物語』などのパロディを通して巷間を楽しませると同  
時に、『伊勢物語』は画題の定番ともなり、浮世絵の  
祖といわれる菱川師宣(二六一八〜一六九四)や、琳派  
の大成者である尾形光琳(二六五八〜一七一六)ら今  
日も著名な絵師達が、作中の名場面や業平の姿をこ  
ぞつて筆にとらえ、屏風絵からかるた絵まで大小に描  
き分けた。

時代を超えて触れる者を蠢惑してきた『伊勢物  
語』。当館の所蔵する鉄心齋文庫もまた、その魅力  
に囚われた収集家による稀代のコレクションであ

かかる「天福本」が一般に用いられている。

歌学における尊重とともに、鎌倉期以降には『伊  
勢物語』の学問化も進んだ。『和歌知頭集』を初めと  
する初期の「古注」は、作中人物や出来事の史実への  
比定から始まったが、室町期には「一条兼良(二四〇二  
〜一四八二)が『伊勢物語愚見抄』を著し、そうした  
牽強付会を排し合理的注釈を旨とする「旧注」の  
時代が開かれた。同時代における連歌の発展と相  
俟つて、宗祇(二四二〜一五〇二)や肖柏(一四四三〜  
一五二七)などの連歌師が『伊勢物語』講釈を行い、  
その間書から多くの注釈書が記されたほか、彼らに  
よる古今伝授の流れを汲む三条西実隆(一四五五〜  
一五三七)や細川幽斎(一五三四〜一六一〇)の手で、  
戦国の乱世にも学問の系譜は脈々と受け継がれた。  
やがて江戸期を迎えた『伊勢物語』は、契沖  
(二六四〇〜一七〇二)の『勢語臆断』によって厳密な  
る。株式会社三和テッキの社長を務めた芦澤新二氏  
(二九二四〜一九八九)は、旧制中学時代に「東下り」  
に感銘を受け、また大学で出会った夫人・美佐子氏  
(二九二八〜二〇一九)との結婚に前後して、古書店  
の店頭で由緒ある写本を入手したことで、『伊勢物  
語』の収集に傾倒していった。現存最古級の写本から  
江戸期のかかるに至るまで、夫妻が「子供のようなら  
の」(新二氏の言)と慈しみ、新二氏没後も美佐子氏  
が育み続けたコレクションは、前述の享受史を包み込  
むほど膨大となる。「二人して集めこし伊勢物語一千  
余点の思ひはふかし」(美佐子氏の詠)——夫妻の思  
いを乗せて当館へ寄贈された鉄心齋文庫は、今後も  
『伊勢物語』の不朽の名を伝えていく。

## プロジェクト立ち上げのころ

小林 健二



Profile

小林 健二 Kobayashi Kenji

東京都生まれ。國學院大學大学院修士課程修了。大阪大学より学位（文学）を取得。1980年国文学研究資料館助手。1984年大谷女子大学専任講師、その後、同助教授、教授を経て、2008年に国文学研究資料館教授。2018年同退職、同名誉教授。研究専門領域は日本室町期文芸。主著書『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲』（2000年、三弥井書店）、『描かれた能楽―芸能と絵画が織りなす文化史』（2019年、吉川弘文館）。

「ないじえる芸術ラボにしようと思うんですが」。キャンベル館長はプリントされたタイトルを示しながら言われた。「ないじえる」は国文学研究資料館（以下、国文研）の英名の略称となっている。「NIJ」からとったものだが、「ナイジェル」と片仮名ではなく平仮名表記するところが絶妙なセンスだとおそれ入った。日本で生まれ育った平仮名で表記するところが、古典籍資料を現代に新しく開いていこうとするこのプロジェクトに、ピッタリだと思ったのである。

「このプロジェクトは現代の作家と古典文学の研究者が協力して行うので、それに共創という言葉を入れたらどうでしょうか」。これは私の提案。そして「ないじえる芸術共創ラボ」となった。この事業で私が果たしたことはこのくらいである。

国文研が設立してそろそろ半世紀を迎える。文献調査数は約四十万点、マイクロフィルム等による収集資料数も約二十万点におよんでいる。昭和五十五年から五十九年まで

の創設からそれほど経っていない頃に助手としてお世話になり、平成二十年に戻ってきたいわば出戻りの私にとっては、両方とも驚くべき数字であるが、さて、これらの成果をどう活用していくかが次の大問題となってくる。大学共同利用機関としての研究者の利活用はもちろんのこと、膨大な資料を広く社会に役立てていかなばならない。文化庁の委託事業として舞い込んだこの事業は、国文研のリソースを社会に還元していく方法を実験的に執り行う一つの試金石となった。

\* \* \*

「アーティスト・イン・レジデンス」と聞いて、何をやるのかわからなかったが、芸術家・作家に国文研に来てもらい、研究資源を使って創作をしてみようのだと聞いて腑に落ちた。そのガイド役に古典インタプリタという、芸術家と研究者の橋渡し役を置くのもよい考えたと思った。初代のアーティストは、小説作家の川上弘美さん、アニメーション作家の山村浩二さん、劇作家で演出家の長塚圭史さんの三人。

館長の肝煎りで人選しただけあってどなたも素晴らしい。川上さんの柔らかくて必要な知識を吸収しようとするスポンジのような柔軟性、山村さんの目標を定めると一つのこと集中する真摯な姿勢、長塚さんの舞台芸術家に特有な軽妙で洒落な面白さ。どなたも毎回お会いするのが楽しみだった。三人とも芸術家としてはもちろん、人として魅力的であったからである。

\* \* \*

事業が軌道にのってからは、副館長という用務をこなしながら、このプロジェクトに併走してきたので、もどかしいくらい中途半端な付き合いとなり、退官してからはまったくの傍観者となった。国文研を離れてから二年になろうとしているが、この試みがどのように結実したのか。今はそれを見るのが楽しみである。「ないじえる芸術共創ラボ」の「ラボ」は研究室・実験室の意味を持つ。その内容が試されているのである。